

藤原房子——ふじわら・ふさこ／ジャーナリスト

はじめに

はたち前後の若者が一つ屋根の下で寝食を共にすることは生易しいことではない。自分の生活リズムをそれなりに持ち、ズボラ、几帳面、無関心、神経過敏、堅ブツ、自己顕示など、好みと癖が妥協しにくい域に達した年代から始まる共同生活は、大事業になる。

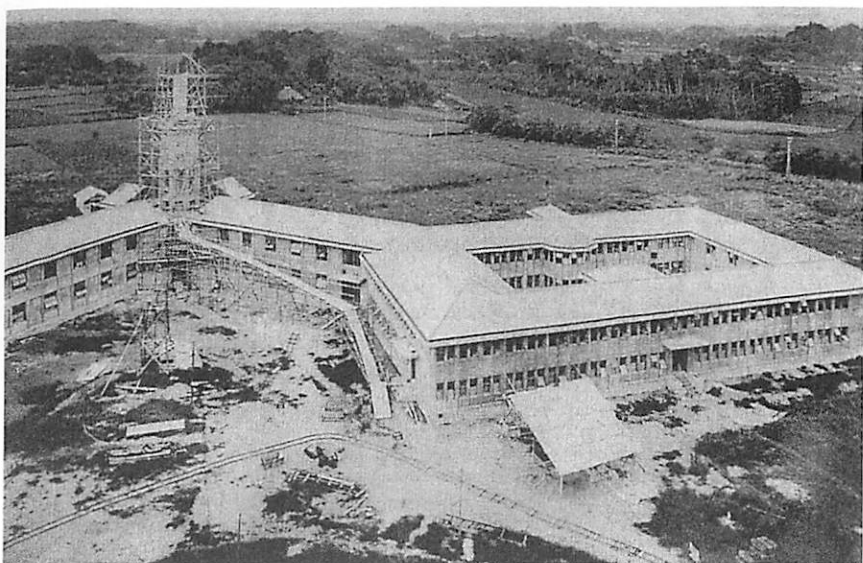
私立東京女子大学のキャンパス内にある学寮で、二〇〇人をこえる女子学生が、一九二四年から六〇年間、不慣れた自治制度を曲がりなりにも取り入れ、煙たい寮監とも概ね仲良く暮らし続けたのは、ほとんど壮拳に近い出来事だったと、振り返って思う。

最初にお断りしなくてはならない。その寮は一九八五年に使用をやめ、以後クラブ活動の部室として使われたが、二〇〇七年にキャンパス整備計画により壊され

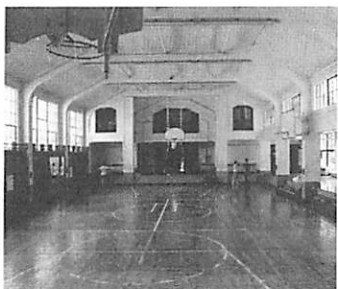
てしまった。関係者の熱心な保存要望も空しく学生のいない夏、轟音とともにチェコキュビズムのしやれた建物にパワーショベルが容赦なく襲いかかり、亭々たるレバノン杉や泰山木も切り倒され、破壊の跡には六階のビルが新しく建った。以下は無残にも消された学寮への一卒業生の挽歌である。

教育理念を具現化した先進的な建物

関東大震災（一九二三年）の直前、寮の外郭はほぼ完成に近づいていた。当時としては珍しい航空写真が残っていて、白鳥が羽を広げたような優美な姿をみせる東西二寮は、中央の厨房や機械室等を含む八角形のタワーを挟んで、ロの字型二階建て、各寮一〇〇人が暮らせる個室が並んだモダンな造りだった。大震災の影響は厨房の備品の一部だけでごく軽



1923年7月に撮影された完成直前の東寮。左側に同じ形の西寮がある。



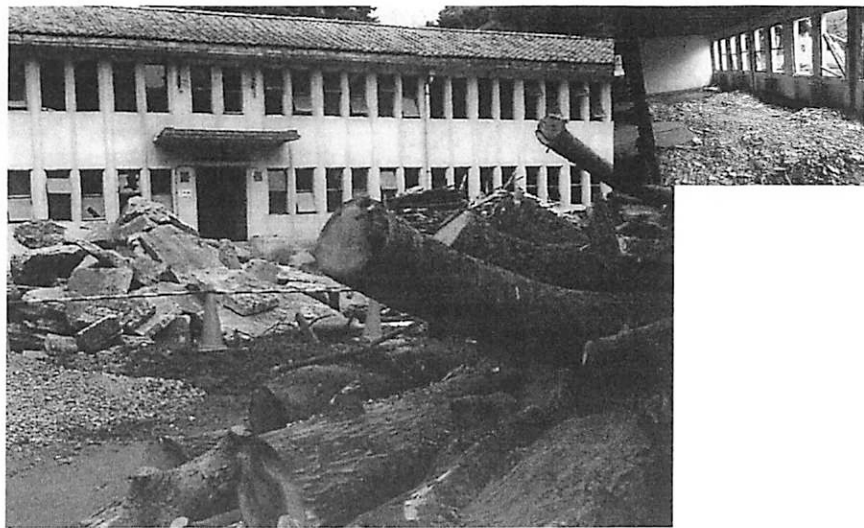
学寮と同じくレーモンドが設計した旧体育館。大学側はすでに解体を決定している。

微だったと記録にある。本物の地震という耐震テストを経て、堅牢さは保証済のはずだった。キャンパス全体の設計はチェコ系アメリカ人アントニン・レーモンド（一八八八年—一九七六年）。帝国ホテルの設計者F・R・ライトの助手格で来日、日本に長く残って各地に多くの優れた作品を残している。東京女子大学の九棟の建物は彼の最も初期の代表作で、特に消された寮と解体予告された旧体育館はキャンパス内で最も長い歴史を刻んできた。

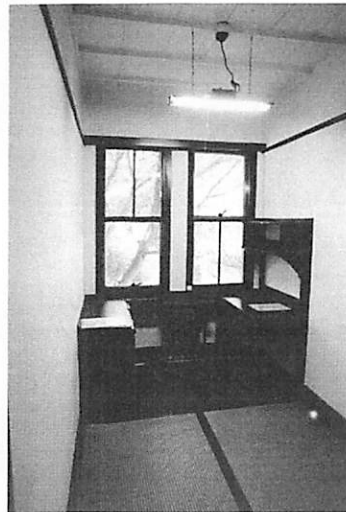
日本の学寮の歴史では本格的な鉄筋コンクリート造りはここが最初という。昭和期に入って慶応大学が建てたが、女子の高等教育がきわめて珍しかった時に、巨額の建設費を寮に投じた例はない。しかも

置の部屋に数人が同居するのが普通だった時代に、ドアに鍵がかかり、他者に煩わされない空間を設けた建物は、記念碑的存在だった。

各室には暖房



解体工事中の東寮。切り倒された樹木が積み上げられている。右上の写真は内部のようす。窓下のラジエーターが個室を示す。



解体前の東寮の個室。

用ラジエーターが備えられ、作り付けの机と本棚、引き出しが大小四つのダンス、他に半間二段の物入れがあった。布団の代わりに貸出のベッドを利用すれば部屋の半分がふさがる。否応なくぎりぎり簡素な生活をせざるを得ない条件が、人間の成長に真に必要なものは何かを考えさせるといふ副次的効果もあった。

この環境は初代学長である新渡戸稲造、安井てつ、A・K・ライシャワーら創立者の掲げた教育理念を具現化したもので、一日に必ず一度は一人になって内省し、祈る時間を持つことを促すためと聞かされた。もちろん個室にこもってロックすれば自分の天下、どんなに散らかしても、忘れても、孤独に泣いても、思いのままだけれど、有無を言わず自分を律する姿勢を

真つ直ぐに問いかけてくる造りでもあった。

簡素さは、物にあふれた今の生活とは対極にある。現代の学生には敬遠されるであろう。解体が決められた理由は大学の説明では老朽化、耐震性の乏しさなどだが、耐震性は関東大震災にも無傷であったことから、明らかに「冤罪」だとの証言が建築構造の学者から出され、日本建築学会ほか、専門家団体等は一三通の保存要望書を提出していた。

ストームの思い出

寮生活を体験した者として強く記憶に残るのは敗戦直後の若者の傾向か、奇抜な習慣である。旧制高校名物だったストーム（嵐。転じて嵐のようなどんちゃん騒ぎ）がここにもあった。私の入学した一九四八年、新入寮生の歓迎会后、真夜中にドアをノックされ、歓迎してくれた上級生の労をねぎらうため賛美歌を歌って廊下を歩いてほしいと、全員が玄関ロビーに集められた。寝ぼけ顔の一年生が一、二階に分かれ、歌いながら口の字型の寮をほぼ一周したころ、いきなり電灯が消え暗闇の中から懐中電灯や蠟燭を持ち白いシートで装った怪物が現れ、襲いかかり、一挙に修羅場になった。お化けに立ち向かう者、闇の中を逃げまどう者、恐怖で収拾がつかなくなるころ電気がついた。眼鏡を

こわした人には後日、委員会が実費弁償をした。

たわいもない行事だが、地方から意気込んできた一年生は完全に毒気を抜かれ、上級生は翌朝涼しい顔で礼を言う。これが毎年東西寮合同の歓迎会の夜盛大に行われ、一人前の寮生になるといふ、女性にしてはやや手荒な通過儀礼だった。ストームの方法は寮によって伝統があり、東寮は私の在寮中は毎年「お化け」、西寮は凝っていて地下の洗濯室に案内し、怪しげな「洗礼式」でふぎけた洗礼名を贈った。そのいくつかは長く寮でその人の通称になった。

日々の生活は委員会が担い、半年ごとに選挙で委員が選ばれ、庶務、クリスマスなどの宗教行事、文化、炊事、清掃など分野別に実務を仕切った。これとは別に一〇室ごとに列と称する組織があり、食堂では列員が朝晩同じテーブルを囲む。列長がいて下級生の相談に乗ったり、親睦をはかったり、規則の変更を伝えたり、地域の町内会のような存在だった。

こんな暮らし方は今の学生には煩わしいのかもしれないが、私たちの世代は受入れ、少なくとも私は大いに楽しんだ。今や寮のカケラもなく、すべては遠い記憶の中である。

東京女子大学レモンド建築東寮・体育館を活かす会ホームページ
<http://homepage2.nifty.com/twcu-raymond/>